



# 心に刻まれる道の風景

島田 英二



シーニックバイウェイ北海道  
道北ルート連携フォトコンテスト2018  
萌える天北オロロンルート ルート賞  
作品名：北へ進路を取れ  
撮影者：佐々木 郁太郎

## 道にはストーリーがある

「道」について何か書こうとしたとき、僕はそれまでの人生で、あまり道を意識してこなかったことに気がついた。映画作りをする人間だからなのか、道は通過する場所というよりも、ロケーションとして見てしまうクセがあるのかもしれない。「道」と聞いて、思い浮かぶのは大きな道路ではなく、路地裏の小道や並木道ばかり。そういういたヒューマンスケールの道が、僕は好きなのだと改めて思った。通過するというより、そこに佇み、そこに何かを感じる、そういうった場所が僕にとっての道だ。

例えば並木道は、それ自体が美しいものだけれど、少し大げさに表現すると、郷愁のようなものを感じる場所。そこには人と人との出会いや季節の匂いがあり、ストーリーが見えてくるような気がする。

2009年に北海道大学のイチョウ並木を舞台にした『銀杏の樹の下で』という短編映画を撮った。年老いた男性が、イチョウ並木に亡くなった奥さんとの若かりし日の思い出を見るというストーリーだ。黄金色に染まる並木道をダンスホールに見立てるという発想は、通過する視点よりも、そこに立ち止まりカメラを据えたらどう見えるのかと考えることで生まれたように思う。

それよりもっと前に撮った、子どもを主人公にした作品『6:00PM』では、札幌市内にある坂道や日常生活の中

で使う普通の道が舞台だった。主人公の男の子は、転校してしまう女の子にどうしてもひと言伝えたくて、坂道を急ぐ。途中で自転車が壊れ、走っては転び、苦難が続く。それでも前へと進むその道は、その後に待ち受けている人生のようでもある。

僕は知らず知らずのうちに、「道」をそのような場所として意識してきたのだと気づいた。



## サバイバルだからこそ思い出に残る道

北海道大学で建築を学び大学院まで出たのに、僕はずっと昔から好きだった映画の道に進もうとアメリカへ留学した。ロサンゼルスで映画作りについて勉強した後、1カ月半をかけてアメリカ全土を旅した。まず西側のロスか



ら東側のクリーブランドへ一気に飛び、そこからグレイハウンドバスに乗ってボストン、ニューヨーク、フロリダ、ニューオリンズなど、街から街へと旅して回った。アメリカらしい、ものすごく広い荒野の真ん中を、バスはひたすら走っていく。次の街まで10時間以上かかることがある。どこかで放り出されたら、遭難してしまうのじゃないかというくらい、何もない真っ直ぐな道。一度は途中でバスが故障してしまい、「もうこれ以上走れない。助けが来るまで、ここで待ってくれ」とドライバーに言い渡された。仕がないから、車の通らない道路の真ん中に寝転んで、たまたま同乗していた見知らぬ人に写真を撮ってもらったこともあった。

今から5年くらい前、1年近くをタイで暮らしたことがある。せっかくなら近隣の国も訪れたいと思い、ソンテウと呼ばれる乗り合いバスを利用し、あるときミャンマーまで行くことにした。

とにかく暑く、英語も通じない世界。褐色の肌をした労働者たちに囲まれ、どこまでも続く平地をガタゴトと走るバスに揺られながら、本当に生きて帰れるのだろうかという不安に襲われた。バスは山岳民族が暮らす地域へと近づいていく。そのたびに文明がどんどん遠のいていく気がした。稻作をしている風景に出くわし、そこに生きる人たちの営みを感じた。深い霧に包まれたとき、僕が生まれ育った釧路の霧とは明らかに違う種類の湿り気を感じた。

もっともっと若い頃には、オーストラリアに留学していたこともある。そのとき、パースという美しい街からワゴンに乗って出かけるワイルドキャンプというツアーに参加した。砂漠のような道なき道を進み、突然、「今日はここで寝る」と言い渡され、テントを張ってシャワーもない場所で夜を明かすという類いの旅。喉はもちろん全身が丸ごとカラカラに乾いていく感じ、ハエが顔にうるさくてもう手で払うことを諦めてしまう感じは、今でも忘れられない。あのとき、走ったのは乾燥しきった真っ直ぐな道。

僕の心に残っている「道」は、ちょっと命の危険を感じるようなエピソードとセットになっているようだ。

## 北海道で心に残るのは海沿いの道

海外でバスや車に揺られているときは、極力その土地にしかない空気や匂いを感じてみたい。そこにある人々の営みを想像するようにしている。それと同時に、知らぬ間に北海道の風景と比べていることがよくある。アメリカでは北海道に似た雄大を感じた。よく道外から来た人が「北海道はアメリカみたいだね」と口にすることがあるが、実際にアメリカを旅してそう思う気持ちが理解できた。一方、タイの風景は北海道とは対局だとも感じた。僕は釧路で生まれ育ったので、子どものころの思い出にあるのは、海岸沿いの道だ。片側が山や緑で、もう片方が海。大学の時には、卒業論文を書くためにオロロンラインを通って、何度も増毛町に通った。道の片側には日本海が広がっていた。気づけば、支笏湖や洞爺湖など湖畔の道を車で走るのが好きだ。まあ、単純なドライブというよりかは、いつもロケハンを兼ねているのだが。

最初に、僕はこれまでの人生で「道」を意識したことなかったと言ったが、実はこれまで通ってきた道は、知らず知らずのうちに心に刻まれ、何かしら僕を動かしているのかも知れない。最近、羊蹄山とか大雪山系とか、北海道らしい山々に続く道を見て、その風景の美しさに惹かれることがある。昔はそんなことを思う人間ではなかったはずなのに。大きな山があり、雄大な自然があり、こんなにすごい景色に囲まれながら、普段の生活を送る人たちがいるのかと思う。そこへつながる道に、映画的なものを感じる。近い将来、そんな風景の中で映画を撮ることがあるかもしれない。

島田 英二

映画監督

### ■ profile

1976年北海道釧路市生まれ。北海道大学で建築を学んだ後、南カリフォルニア大学のワークショップで映画制作を学ぶ。このとき、ロサンゼルスで制作した短編映画『Hands』がアメリカン・ショート・ショートフィルムフェスティバルに入選、国内外で紹介される。帰国後、多数の短編映画を制作し数々の国際的な映画賞を受賞。2008年より北海道情報大学情報メディア学科准教授。2016年より札幌国際短編映画祭のフェスティバル・ディレクターに就任。

